

劇場におけるコモンスペースに関する研究
—北上市文化交流センター さくらホールを事例として—
A STUDY ON THE COMMON SPACE AT THEATERS
-A case study on Sakura Hall Kitakami Arts Center-

5.建築計画 -2.施設計画. e劇場・ホール
劇場 コモンスペース 環境行動
練習室 マッピング サードプレイス

正会員 ○小塚 智世*
同 加藤 彰一**

KOZUKA Tomoyo
KATO Akikazu

Abstract

Recently, Public Theater is attracted attention as a remarkable theater which making relation with the area through the creative activity. As a place of civic cultural activities, Effective practical use is demanded on the common space at theaters. This study focuses on new features of lobby areas or common spaces at a theater through the analysis of user behaviors during the exercise of their performances.

1. 研究の背景

戦後の多目的ホール建設、80年代後半以降の専用ホール建設と、これまで多くの劇場が計画されてきた。そして、近年上演に至るまでの創造活動や、創造活動を通じた地域との関わりを重視するパブリックシアター¹⁾が注目されている。様々な劇場計画に伴い、利用者の過ごし方も多様になっており、多様な過ごし方に対応可能な劇場環境及び劇場周辺環境が求められている。特に、公演時以外もロビーやホワイエ、練習室まわり等のコモンスペースは有効活用が求められており、市民の文化活動の場として、計画段階や管理運営上留意すべき空間である。

2. 研究の目的

劇場のコモンスペースの日常的な利用に注目した既存研究では、以下のものがあげられる。小川、勝侯による「劇場・ホールのロビー・ホワイエにおける公演時以外の利用に関する調査研究」では、全国の客席数1200席程度の劇場を対象にロビー・ホワイエの公演時以外の利用実態を明らかにしている。篠木、浦部による劇場・ホールの利用者空間に関する一連の研究では、一般開放性を重視した施設を対象に、寄り付き易さに焦点をあて利用実態と施設印象について明らかにしている。

そこで本研究では、調査対象を1施設に限定し、劇場のコモンスペース²⁾における利用者の多様な過ごし方を確認する。滞在行動に着目し、行動と施設の空間構成との関係について考察する。以上を通して、利用者の求める劇場環境に対する計画指針を得ることを目的とする。

3. 研究方法

3-1. 調査対象

物的要素の充実したコモンスペースがあり、市民の文化活動が日常的に活発に行われている劇場の事例として、北上市文化交流センターさくらホールを対象とする。

3-2. 調査対象施設の概要

アートファクトリーと呼ばれる練習室群が中央にあり、それらを囲むように大ホール(固定席1310)中ホール(固定席450)・小ホールが配置されている。

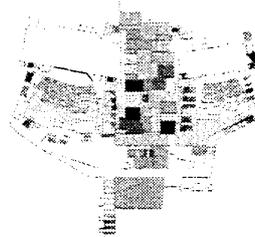


図1
アートファクトリーのダイアグラム

※出典：新建築2004年10月号

ホワイエは、大・中ホール共に、ステップホワイエとよばれる、移動の他滞在も可能な空間が計画されている(写真1、2)。中ホールの場合、公演前後や幕間における座っての滞在や、小規模の発表場として用いられる。大ホールの場合、階段に沿って5箇所小さな滞在空間があり、植栽と椅子3個と机1個で形成されたソシオペタルな家具配置のほかに、ソファが1、2個配置されている。この大・中ホールのステップホワイエに囲まれた中央にアートファクトリーが配置されているため、鑑賞者と活動者の間に見る見られるの関係が発生する。

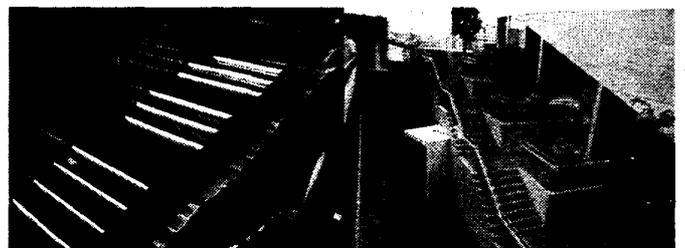


写真1、2 ステップホワイエ(中ホール、大ホール)

*三重大学大学院工学研究科 博士前期課程

**三重大学大学院工学研究科 教授・工博

* Graduate Student, Graduate School of Eng., Mie Univ.

** Prof., Graduate School of Engineering, Mie Univ., Dr. Eng.

アートファクトリーは大小 22 の練習室とコモンスペースからなる一体的な空間であり、市民の多様な文化活動に対応する場である。各練習室は、レベルの異なる配置とガラス張りの設えにより、活動者の練習や創作活動を可視化している。練習室まわりのコモンスペースは、テラス、植栽、トップライトにより半屋外化した空間が計画されており、公園のような一般開放性が重視されている（写真3）。設えは、椅子4個と机1個で形成されたソシオペタルな家具配置であり、1グループ1テーブルといった使い方が主である（写真4）。椅子カバーのオレンジ・黄・茶のカラーバリエーション、夜には各々にあたるスポットライトが、利用者の滞在行動を際立たせる。



写真3、4 アートファクトリー（全景、家具配置）

3-3. 調査方法

ヒアリングにより、利用者の意識調査を行い、施設の満足度や利用者間の接触や触発の有無について把握する。ヒアリング内容については、表1の通りである。

また、調査日の8月28日19:30~21:00にかけて、中ホールにて「韓国楽器のための伝統・現代音楽コンサート」が行われている。公演前後の19:00~19:30、21:00~22:00に、15分おきのマッピングにより、練習室まわりのコモンスペースにおける利用者の多様な行為内容の把握、行為に影響を与えている物的要素の抽出を行う。また、公演が利用者にも与える影響として、ホワイエとアートファクトリー間の見る見られるの関係や、相互の接触が見られた場合、場面抽出する。調査時間内の練習室における活動について、表2に示す。

表1 ヒアリング調査内容

対象	ミュージックルーム2 アクティングループ 大アトリエ アンサンブルルーム1,2 トレーニングルーム スタジオ&ミキシングルーム テラス
期間	2009.08.28 20:00~22:00
方法	対面によるヒアリング調査
ヒアリング項目	・利用頻度 ・カーテンの開閉と他者の視線に関する意識 ・他のグループとの交流の有無 ・北上市文化交流センターで活動している理由 ・他の劇場と併用しているか ・劇場利用全般に対する自由意見

表2 アートファクトリー活動概要

活動場所	活動時間	演目・活動内容
ミュージックルーム1	19:00-21:00	カルチャー教室
ミュージックルーム2	19:00-20:00	学生バンド練習
	20:00-21:00	社会人バンド練習
アクティングループ	19:00-21:00	体操教室
	21:00-22:00	ダンス教室
大アトリエ	20:00-21:00	ダンス教室
	21:00-22:00	社交ダンス練習
アンサンブルルーム1	19:00-21:00	小・中学校の合唱サークル
アンサンブルルーム2	19:00-20:00	個人ドラム練習
	20:00-22:00	個人ドラム練習
レッスンルーム1	18:00-20:00	個人練習
レッスンルーム2	19:00-20:00	バンド練習
	20:00-22:00	個人練習
小アトリエ1,2	17:00-22:00	個別学習塾
スタジオ&ミキシングルーム	12:00-22:00	録音

4. 調査結果

4-1. ヒアリング調査結果

利用頻度に関して、スタジオ&ミキシングルームを例外として、最低でも週1回は通っており、「毎日」や「週5回」との回答からもリピーターが多いといえる。

活動者の他者の視線に関する意識を表3にまとめる。練習室のファサードがガラス張りであることにより、視界が開けていることに関し、ほとんどの活動グループが「気にならない」と回答した。ダンスやバンド練習をしている者にとって、練習の先にある発表を見据え、練習の段階から他者に活動を見せようという自発的なパフォーマンスが日常的になされており、それはストリートパフォーマーと同じ感覚であると考えられる。ただ「慣れたらオープンなほうが気持ちいい」との回答もあり、視線に関する意識や考え方には個人差があり、劇場利用への慣れが影響しているといえる。一部の利用者から「熱心に練習に励んでいる練習室の風景をよく見かける」という活動を見る側の意見も得られた。

表3 視線に関する意識調査結果

活動場所 活動グループ	カーテン	視線に関する意識	視線に関する自由意見
ミュージックルーム2 社会人バンド(5名)	閉	気になる	—
アクティングループ Hip-Hopダンス教室(20名)	開	気にならない	新規の生徒に興味をもってもらえるため、開けている。
大アトリエ 社交ダンス個人練習(2名)	開	気にならない	カーテンも扉も開けて、スペースを確保したい。
アンサンブルルーム1 小・中学校合唱サークル	開	気にならない	練習中ほとんど視線は気にならないようだが、たまに気が散っている場合、カーテンを閉めることもある。
アンサンブルルーム2 ドラム個人練習(1名)	開	気にならない	自己顕示欲が強い。練習中ときどき外を見る。
トレーニングルーム ダンス個人練習(2名)	開	気にならない	ダンサーなので、視線を気にするのではなく、人に見せようという意識をもたなければならぬ。
スタジオ&ミキシングルーム レコーディング(3名)	開	気にならない	人に見てもらうために活動しているので、むしろ見てほしい。
デッキ 高校生(10数名)	—	気にならない	活動を見てください。
デッキ 社会人(1名)	—	気にならない	—

他のグループとの交流に関して、「イベントを通しての交流がある」や「共に活動したい者と出会う機会がある」との回答が、一部のダンサーにより得られた。

劇場利用全般に対する自由意見では、「劇場スタッフが親切である」という劇場スタッフと利用者間の接触や、高校生の利用者にとって「多くの出会いの場である」という劇場での接触の多さを確認する意見が得られた。

以上のヒアリングにより、活動を見せる側の心理や、見る側の利用者があること、特に高校生やダンサーにとって他者との接触が多いことが分かった。

4-2. マッピング調査結果

コモンスペースにおいて見られた利用者の行為内容は、挨拶・会話・携帯電話使用・ゲーム機使用・自主学习・ミーティング・楽器練習・手芸・巡回・読書・睡眠である。利用者の行動特性について以下にまとめる。

① 教師や親による見守り行為

高校教師の1、2階の巡回、活動中の小・中学生の親の会話行為による待機が見られた。見守りは、ガラス面越しに数分活動状況を確認するものであり、活動グループ自体は活動に集中している。図1のように、親同士の滞在のすぐそばで、高校生が楽器練習やミーティングによる滞在进行しており、年齢層とは無関係に、コモンスペースの場所選択がなされていることが分かる。

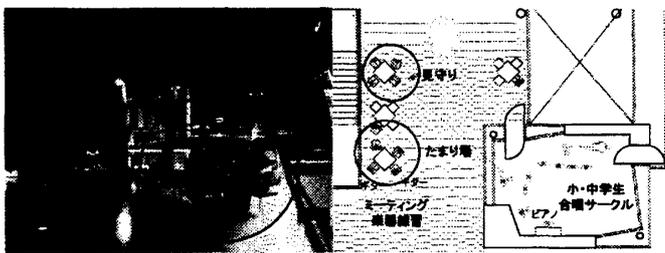


図2 アンサンブルルーム1まわりの利用状況

② 自主勉強スペースの確保

1グループ1テーブルといった使い方がされ、数名の高校生グループ、社会人を確認した。図3のように、ロールブラインドや壁により視界の正面が閉じられた座席を選択しやすい傾向にあり、荷物等での場所とりも見られ、各自がより集中できる学習ゾーンを形成している。

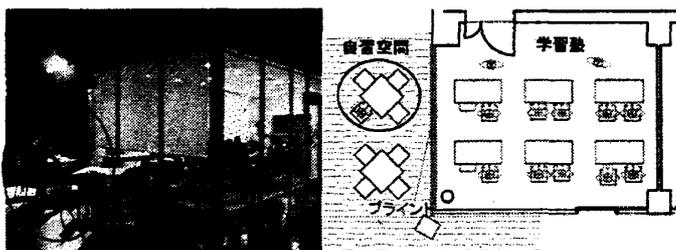


図3 小アトリエ1まわりの利用状況

③ 練習室外の活動

練習室を利用しないが、コモンスペースを利用するグループが多数存在した。ミーティング等会話行為を多く交えながらの練習により、密なコミュニケーションをとっている。1グループが4名以上の場合、手すりや壁にもたれて、デッキに座ってといった、様々な姿勢での滞在行為が見られた。また、調査時は市内の高校の文化祭準備期間であり、催し物のミーティングをする学生を多く確認した。準備期間内は、下校後毎日劇場に訪れることが習慣となっており、劇場を活動拠点としている。



写真5、6 ミーティング風景

④ 出演者と劇場利用者の交流

出演者の、中ホールステップホワイエから1階アートファクトリー、ロビーへとといった移動が見られ、その際自主勉強中の高校生との会話による接触が見られた。出演者との交流をきっかけに、その後高校生らは公演を鑑賞しており、芸術の接触へとつながっている。

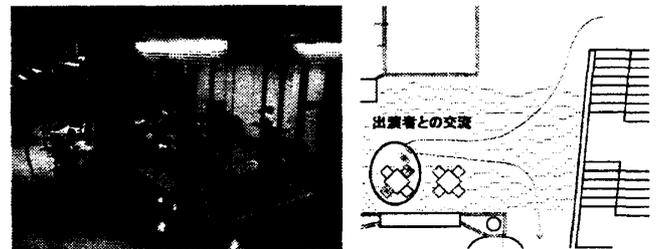


図4 アトリエテラスの利用状況

⑤ 練習室スペースを超えての活動

練習室のスペースだけでなく、扉やカーテンを開け、練習室と接しているテラスも利用しての社交ダンス練習が見られた。これには、スペースを最大限確保しようという意図があるが、他者の目を引く練習風景となる。

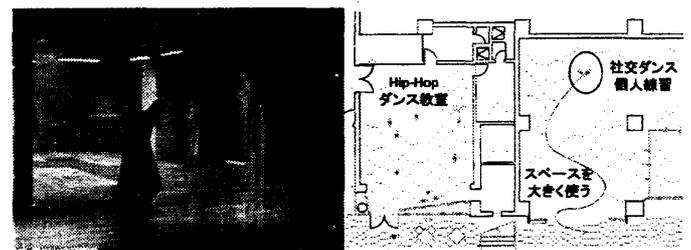


図5 大アトリエまわりの利用状況

5. まとめ

利用者にとっての場の特性を以下にあげる。第一に練習室のガラスのファサードにより、常に練習室とコモンスペース間で見られるの関係があることだ。ヒアリングによって、練習段階から活動者は他者に見せようという意識のもと活動していることが分かった。特にダンサーにとって、活動の可視化は、新たな活動メンバーとの接触やダンス技術に対する触発につながりやすいと考えられる。第二にアートファクトリーがホワイエと接していることにより、公演時双方に見られるの関係があることだ。活動の可視化により、人そのものや活動に目をひかれ、時に貴重な人物や芸術との接触につながる可能性がある(写真7)。第三に、手すりやテラス、ガラス面等の建築的要素の充実があげられる。座り込みやもたれながらの姿勢によって、会話行為や活動を眺める行為を誘発し、キーパーソンを囲むヒト拠点の滞在も見られた。第四に、家具やロールブラインド等の付属的要素の充実があげられる。グループごとの領域を形成しやすく、モノ拠点、家具を利用しての滞在がほとんどであった。以上より、物的要素の充実、特にガラス面の多用は利用者に与える影響が大きいと言える。

アートファクトリーの利用者に関して、調査期間は学生、特に高校生が多かった。学生にとって、アートファクトリーは学校や家以外の、文化活動や学習の場であり、何より学生同士の新たな接触・触発の場である。次に、学生の活動を見守る親や教師がいる。見守りによる滞りが、親同士のコミュニケーションの場ともなっている。さらに、社会人の利用者がいる。彼らにとっても、学生と同様に文化活動の場や学習の場であり、盛んな学生の文化活動に接触、触発される。このように、活動内容や年齢層の異なるグループが混在しており、相互に影響を受けていると考えられる。

調査により、劇場が文化活動を核とした市民にとってのサードスペースとなりうるということが分かった。しかし、アートファクトリーは、各々のサードスペースだけでなく、上演に至るまでのプロセスを見せる場でもある。今後の展開として、現在の日常的なアマチュアによる活動が、地域に根付き地域に広がっていき、地域独自の創造活動が生まれることが期待される。



写真7 小澤征爾氏との交流
新日本フィルハーモニー北上公演時、他の練習室の活動に興味を示され、指導される様子
出典：株式会社久米設計

6. 今後の課題

今回、対象施設のホワイエの利用実態について十分に把握できていない。対象施設は物的要素の充実したホワイエであるため、公演時多様な行為が見られると考えられる。ホワイエは、公演前後や幕間は魅力的な社交の場、公演時以外は文化活動の場としての機能が求められるため、両側面からの計画が必要である。前稿では、客席数2000席程度の5劇場を対象に、公演時のホワイエにおける鑑賞者の滞在行动に着目し、行為内容と、行為と関係する場の特性に関する考察を行った。今後の課題としては、日本の劇場における物的要素の充実したホワイエや、サービスやアメニティの充実した海外の劇場におけるホワイエで、幕間や公演前後、鑑賞者が楽しむための仕掛けへの知見を得ることである。次に、公演時以外ホワイエを有効活用するため、利用実態を把握し管理運営を見直すことである。また、対象施設は、創造活動を通して地域との関わりを形成する劇場の一事例であり、そうした創造活動が行える練習室を充実させた他の劇場の利用実態を知り、比較する必要がある。

謝辞

本研究の調査にご協力頂きました、久米設計の野口秀世氏、兒玉謙一郎氏、北上市文化交流センターの千田敏氏、野坂ゆきえ氏をはじめ劇場スタッフの皆様、サイモン・ハッチンソン氏をはじめ出演者の皆様、劇場利用者の皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

注

注1) 「パブリックシアター」という用語は、清水の著作本(文6,7)の中で使用され、「舞台芸術をととして公共圏の形成を目標とする」次世代の公立文化施設のことを示す。舞台芸術という芸術行為を通して人々が地域との関わりを考える場であると定義されており、本稿でもこの定義を使用する。

注2) 本稿における、コモンスペースは、ロビーおよび練習室まわりのフリースペースと定義する。

参考文献

- 1) 小川 利和, 勝又 英明:「劇場・ホールのロビー・ホワイエにおける公演時以外の利用に関する調査研究」日本建築学会計画系論文集 (539), 127-131, 0101
- 2) 浦部 智義, 篠木 正義:「劇場・ホールの施設利用に関する研究:一般開放性を重視した劇場・ホールの利用者空間に関する研究(その1)」学術講演梗概, 179-180, 0807
- 3) 篠木 正義, 浦部 智義:「施設利用者の劇場・ホールに対する印象評価に関する研究:一般開放性を重視した劇場・ホールの利用者空間に関する研究(その2)」学術講演梗概, 181-182, 0807
- 4) 佐藤慎也, 本杉省三:「地域文化団体の創造活動における公共ホールの利用に関する研究:長岡リリックホールを事例として」日本建築学会計画系論文集(593), 65-72, 0507
- 5) 木下 誠一, 池谷 辰仁, 今井 正次:「中高生の「居場所」の成立条件に関する研究:三重県における居場所づくり事例の分析を通して」日本建築学会計画系論文集 73(623), 39-46, 0801
- 6) 清水裕之:「21世紀の地域劇場 パブリックシアターの理念、空間、組織、運営への提案」鹿島出版社 9907
- 7) 清水裕之編著:「わたしたちと劇場」芸団協出版社 9307